

# 平成 30 年度熊本県中学校保健体育研究発表大会天草大会の取組

## 1 研究の目的

近年、生徒一人一人の生活スタイルが多様化し、生徒間に運動に対する興味・関心に大きな差が生じている。天草郡市の生徒も日常生活で運動を行う生徒とそうでない生徒に分かれ、運動習慣や体力の二極化などが課題である。そこで、本郡市の研究では、運動有能感の3つの要因を研究の視点として設定し、授業改善を図り、体育の授業や運動への内発的動機付けを高めていく。そして運動が苦手な生徒も得意な生徒も、すべての生徒に運動の楽しさを味わわせることで、生涯にわたって運動に親しむ生徒を目指していきたい。

## 2 研究主題

「自ら運動の喜びや楽しさを求め、生涯にわたり健やかな心と体をはぐくむ保健・体育学習の在り方」  
 — 学びに向かう力を高める授業の在り方を通して —

## 3 研究の構想（仮説・内容）について

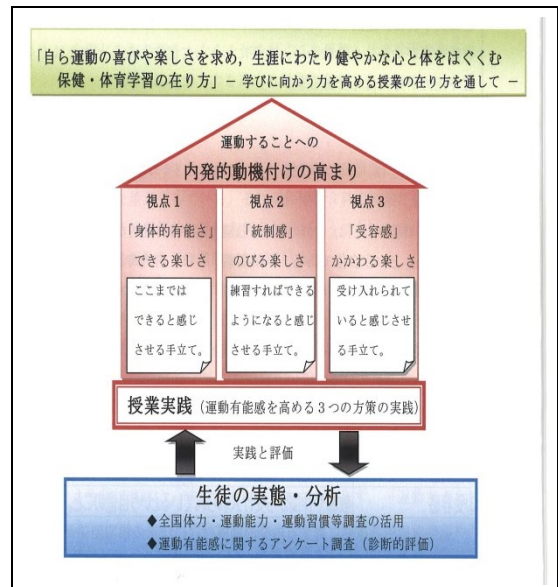
(1) 研究の仮説について

運動有能感（※1）を高める指導方略を、生徒の実態に応じて効果的に用いた授業を展開すれば、運動への内発動機付けが高まり、自ら進んで運動に親しみ、運動の喜びや楽しさを味わい、生涯にわたって健やかな心と体をはぐくむ資質や能力が身に付くであろう。

※1 運動有能感とは。

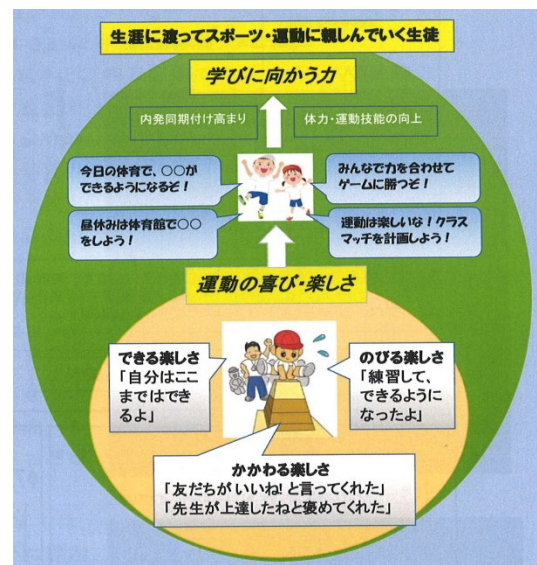
「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」の3因子から構成されている。

3つの因子	因子の説明
①身体的有能さの認知	自分はここまでではできるという肯定的な自信のこと。
②統制感	自分の努力や練習によってできるようになるという自信のこと。
③受容感	教師や仲間からうけいれられているという自信のこと。



## 4 研究の実際 研究の視点について

本郡市では、運動有能感の3つの因子を、「できる楽しさ」「のびる楽しさ」「かかわる楽しさ」と捉え、研究の3つの視点として設定した。それらの3つの視点を意識した授業実践を行い、運動の楽しさを体感させることができれば、生涯にわたってスポーツや運動を実践していく力になると考えた。その力を「学びに向かう力」と捉え、今の学びが将来の行動につながっていくことを目指していく。研究を進めるにあたっては、全校体力・運動能力、運動習慣等調査のデータを活用し、意欲と体力の相関関係の分布図を作成し、その変容を見ていく。



## 視点1 身体的有能さの認知「できる楽しさ」

### －自分はこちらまでは出来ると感じさせる手立て－

個人競技では、できる・できないがはっきりしており、周りと比較して自分を見てしまうと、自分を低く評価をしてしまう生徒がでてくるようになる。特に身体能力の低い生徒や運動経験の少ない生徒は、運動ができない・苦手といった気持ちをもったまま授業に参加し続けることになってしまっている。そのことが体育の授業や運動への意欲の低下の大きな要因となっていると考える。

そこで、授業改善の視点の1つ目として、「自分は今ここまでできる。ここまでできるようになった。自分の記録やグループの成績がここまで高まった」と「できる楽しさ」を感じさせるような手立てを行った。

〈競争内容や競争形式の工夫の例〉

- ・競う内容を、「実際のタイム」から「自己の記録の伸びの得点」に変更し、個人の伸びに着目する個人内評価を行わせる。
- ・個人の記録の比較ではなく、グループの記録の合計で競うなど、集団対集団の競い合いを行わせる。

## 視点2 統制感「のびる楽しさ」

### －努力すればできるようになると感じさせる手立て－

授業の中で生徒に、「今はできないが練習をしていけば記録や技能が向上していける」と実感させることは、生徒が意欲を持って学習していくために、とても重要なことである。練習を工夫したり、いろいろな練習のアイデアを考えたり、見通しを持って練習を行うなどして、自分の記録や技能が向上したという成功体験を積み重ねることが大切になってくる。そこで、授業改善の視点の2つ目として、今はできないが、練習していけばできるようになる「伸びる楽しさ」を感じさせる手立てを行うようにした。

〈学習カードの工夫の例〉

- ・記録用紙にラップタイムや記録・得点を記入し視覚的に学習と成果の関係をつかませる。
- ・「発見ボード」により個人技能の練習の工夫とその成果をチームで共有する。

## 視点3 受容感「かかわる楽しさ」

### －仲間を受け入れられていると感じさせる手立て－

体育の授業は、勝敗や結果が一目瞭然で、生徒は授業中さまざまな場面でお互いに比較し、評価しあっている。その時、肯定的な評価を得ているのは、運動が得意な生徒であることが多い。逆に運動が苦手な生徒は、評価の対象になることも少なく、競争やゲーム場面で自分の考えを言ったり、自ら活動したりすることにも消極的になりがちである。生徒たちは「できる」「できない」といった部分だけに注目されがちであり、それを高めようとすればする程、運動技能が低い生徒や運動が苦手な生徒は自信を失い、積極的に授業に参加することは難しくなる。そこで、授業改善の視点の3つ目として、全ての生徒が学習に参加し、自分の意志によって活動でき、その中で仲間から肯定的に評価される「かかわる楽しさ」の手立てを行うようにした。

〈相互の認めあいのための工夫〉

- ・兄弟チームを作り、班の課題に対して、教え合い、励まし合いを促進させる。
- ・めあてに応じたMVPの選出と感想の発表をさせる。
- ・チーム内での役割分担を明確にしたり、役割を交代したりする。

